

明日への架け橋 若手技術者!

インフラ維持・整備に取り組む地方公共団体や建設会社の若手技術者にインタビュー。現場からの生の声を、建設関係者やこれから建設業を目指す若者に向けてお届けします。

Vol.13

SMCシビルテクノス株式会社
工事統括部 工事部

後藤京太さん *Kyota Goto*

学生時代の経験から志した道

老朽化する橋に挑む若手技術者



● PROFILE ●

ごとうきょうた
後藤京太

1998年生まれ。埼玉県出身。国士舘大学理工学部を卒業後、2021年にSMCシビルテクノス株式会社に入社。学生時代に橋の補修・補強工事の重要性を実感し、これまで設計から現場まで幅広い業務に携わっている。趣味は将棋で、小学生の頃から現在も続けている。

今回紹介するのは、SMCシビルテクノス株式会社で老朽化が進んだ橋の補修・補強など、リニューアル工事に携わる後藤京太さん。同社は橋や河川の維持・更新を通じて、災害に強い国土づくりに貢献しています。

学生時代に行った橋の損傷状態の調査で、地震が起これば崩れてしまう老朽橋の現状を目の当たりにし、「自分が社会に貢献できることは何か」と考えた後藤さんは、2021年に同社に入社しました。入社以来、現場での施工から本店での設計業務まで幅広い経験を積み、現在は、中国自動車道の橋梁の床版取替工事に従事しています。

現場と設計の双方を理解するからこそできる調整力と判断力を武器に、日々奮闘しながらも着実に成長を遂げている後藤さん。業務に込める想いや、これから挑戦したい未来像について伺いました。

橋の老朽化を前に 補修・補強の道へ

——建設業界を志したきっかけを教えてください。

父が外装工事の仕事をしていた影響で、建設業界に元々興味があり、大学は国土館大学の理工学部・まちづくり学系に進みました。主に構造力学やコンクリートに関する勉強をしていたのですが、卒業研究で橋の損傷状態の調査を行った際に、多くの橋が老朽化している現状を目の当たりにしました。小さな橋でも、大きな地震が起これば壊れてしまう実態を見て、「自分が社会に貢献できることは何か」と考えたとき、補修・補強工事の分野に携わりたいと思ったのがきっかけです。

——SMCシビルテクノスを志望した理由は何ですか。

当社がリニューアル工事に注力している点に魅力を感じたからです。また、インターンシップに参加した際に、社員の皆さんの人柄の良さが感じられたことや、現場作業を実際に体験できたことも大きな決め手でした。どういう会社なのか分からない状態で入社するのとは違い、事前に雰囲気を知ることができたのは安心感につながりました。

——入社後はどのような仕事に取り組んできましたか。

入社後は、まずトラス橋の補修・補強工事の現場に配属となり、そこで施工管理に約2年半携わりました。その後本店の設計部に異動となり、約1年半いました。現在は、高速道路の橋梁の床版取替工事に従事し3カ月ほどになります。

現在の役割の一つは、現場と設計の間をつなぐことです。現場の状況によっては設計図通りに進められない

場合もあるため、その際の細かな調整や、設計部では作成しない復旧作業図面の作成も担当しています。また、実測した上で施工図を起こす作業も行っています。現場で設計をしたり図面を書いたりというのは今までやったことがなかったので、まだ不慣れな部分もあり、日々勉強しています。

——これまでに2つの部署を経験されていますが、入社前と入社後で仕事に対する印象に変化はありましたか。

土木は大きな構造物を作ることもあり、ちよつと大雑把なイメージがあったのですが、実際には非常に細



現在担当している下本村川橋の現場で作業している様子。施工箇所が図面通りに仕上がっているのかを、計測して確認している。

かな作業の積み重ねで成り立っていることに驚きました。寸法や材質など、全てに理由があることを知り、毎日が学びの連続です。また、常に現場で作業するのかもしれないですが、実際には室内での事務作業も多いです。今の私の業務は6〜7割が事務作業なので、これもギャップの一つでした。

現場と設計で磨いた 「判断力」と「対応力」

——業務で心掛けていることを教えてください。

作業内容や工程などで変更が発生した場合には、どこにどのような影響が出るのかを常に考えることを心掛けています。ただし、一人で抱え込まず、上司や業者の方、職人の皆さんとも密に連携し、相談することを重視しています。相談する際には、何も考えずに聞くのではなく、自分なりの提案もした上で意見を伺うようにしています。

——これまでの業務の中で、特に苦労したことは何ですか。

現場でイレギュラーな事態が発生した時の対応です。図面の寸法と実際の寸法が異なりボルトが入らない、角度が少しだけ曲がっているなど、それぞれは細かなことでもその都度状況に応じた調整が求められます。

——イレギュラーな事態は、割と発生するものですか。

そうですね、かなり多いです。「図面に従って部材を取り付けようとしたが、取り付けられない」といったケースもあるので、工期が決まっている中でいかに迅速に対応するかが求められます。対応が決まらなないと現場も止まってしまうので、相応のプレッシャーを感じることもあります。

——そういった事態が起きたときには、どのように対



現在担当している下本村川橋の全体写真。既設桁の撤去が完了し、新設桁の架設に向けた準備作業を進めている。

応ずるのでしょうか。

現場で可能な条件を全て洗い出し、1案に限らず2案、3案と複数の選択肢を検討します。現場としてどういうやり方であればやりやすいのか、また工期やお金の問題も絡んできますし、これらを総合的に判断して最適な案を決めていきます。以前、設計部に在籍していた時には、現場からの問い合わせに頻繁に対応し、問題解決に奔走していました。

——判断が求められる場面では、どのような点を重視していますか。

安全や品質のルールが守られているかを最優先に判

建設DX 推進

SMCシビルテクノス開発 「ジャッキアップシステム」について

「ジャッキアップシステム」は、SMCシビルテクノスが開発した、橋梁の支承取替工事における作業の効率化・省力化・品質向上を目的とした独自の計測・管理システムです。

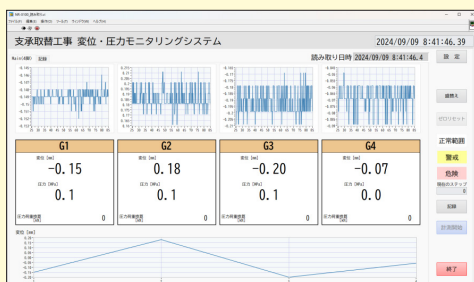
従来の工法では支承数が多いほど多くの作業員が必要となり、作業効率の面で課題があり、加えて目視による誤差や記録ミスが生じるリスクもありました。本システムはPCモニターによる一括管理システムを構築することで、上記課題を解消し、施工品質向上と省力化を実現します。

●本技術の活用により期待される効果

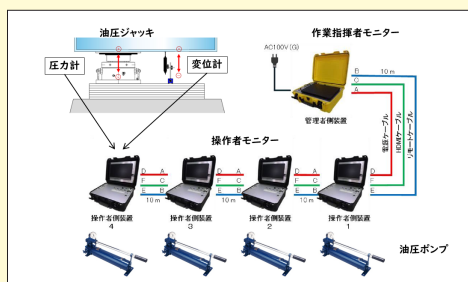
①作業人数を半減 ②作業時間を大幅短縮 ③変位超過時の警告機能を実装し、安全性も向上

●今後の展開

このシステムは、NEXCO東日本発注のリニューアル工事で初めて実装し、高精度な作業と省力化が評価され、発注者から高い評価を得ました。今後は、支承数や工事規模に応じたバージョンアップも予定しており、同社の標準施工システムとして全現場への展開を目指しています。



システム画面
(支承ごとに変位や圧力が確認できる)



システム構成イメージ



油圧ジャッキと変位計



手動ポンプ



作業風景

断しています。文献を調べたり、人に聞いたりしてルールを確認し、それに沿った判断を心掛けています。

——大変なことも多いと思いますが、対応力が磨かれますね。

現場ごとに作業スタイルや重点ポイントは異なりま

すが、常に「何か起こるかもしれない」という危機感を持って作業に臨むことは本当に大切だと感じています。特に現場で何らかの変更が生じた際には、複数のシミュレーションをしながら対応することが重要です。先輩方からも、「常に先を考えて行動しろ」とよ

く言われていますし、臨機応変な判断が求められる仕事だと実感しています。

入社以来の経験を糧に 後輩を導く存在へ

現場では多くの方とコミュニケーションを取る機会があると思いますが、大変だと感じることはありませんか。

入社当初は、自分の意見をうまく伝えられず苦労しました。ただ、最終的には「人と人との関係性」ということに改めて気付かされました。大切なのは、相手の立場に立つて話すことで、同じ方向を向くことができれば、良いコミュニケーションが取れると感じています。

そうした経験を踏まえて、コミュニケーションにおいて心掛けていることはありますか。

「相手はどうしたいか」、そして「自分はどうしたいか」を確認しながら、両者で擦り合わせることを意識しています。コミュニケーション不足によって起こるズレを防ぐために、相手の意見や考えを深く聞き出し、踏み込んで理解していく姿勢を大切にしています。

入社5年目を迎え、新人時代と比べて心境に変化はありますか。

新人時代は「とにかくやってみる」「質問して知識を吸収する」ことを意識していました。今はこれまでの経験や知識をもとに、「どのように進めるべきか」を考えながら行動することを意識しています。最近では部下もでき、指導への意識も芽生えています。

部下を指導する上で気を付けていることはありますか。

業務として必ず行うべき部分と、その人の個性を生

かして自由に考えてもらう部分を見極めることです。自分で考える習慣を身に付けてもらうためにも、あえて細かく指示はしないこともあります。

後藤さんご自身、今後どのように成長していきたいですか。

先輩方のように部下を引っ張っていきける存在になりたいです。その目標達成に向けて、現在は1級土木施工管理技士と技術士の資格取得に向けて勉強をしています。分らないことはすぐに上司へ質問できる環境であるため、安心して学びを進められています。

「好き」を原動力に 生きた知識を積み重ねる

土木・建設業界のどんなところが好きですか。

新しいことや未知の分野を常に学び続けられる点です。また、自分が携わったものが形になっていく過程を見られるのも魅力の一つです。好きな仕事に携われている喜びを日々感じています。

業務において面白さを感じる瞬間はどんなときですか。

施工が終わり、竣工検査で自分が携わった現場が完成した姿を目にするときです。これまでの苦労や努力が形になった瞬間にやりがいを感じます。

建設業界の将来について、どのような展望をお持ちですか。

今後は業務の効率化がますます重要になると考えています。自分自身も仕事をしていて、「この業務はもっと無駄を省けるよな」と思う場面は多々あるので、自動化やAIの技術を必要に応じて取り入れていくのは良いことだと思います。

ただ一方で、そうした技術に頼りすぎて、作業の本

質を理解しないまま仕事を進めるといったことは避けたいと考えています。上司や協力会社の皆さんから直接教わった知識や経験を受け継ぐことも大切にしたいです。

今後挑戦したい仕事はありますか。

これまでトラス橋や鉸桁橋^{びんげた}に携わってきましたが、今後は斜張橋の施工にも挑戦したいです。また、会社としては環境保護対策に力を入れていて、現場では燃費低減型の重機や手洗い水循環装置などを導入しています。私自身もこうした環境負荷の低減や、騒音対策などにも取り組んでみたいと思っています。

若手技術者へアドバイスをお願いします。

分からないことは、納得できるまで自分で調べ、実際に体験してほしいです。そうして得た知識こそが「生きた知識」になります。私自身は不器用な方ですが、それでも自分でやってみることで確実に身につく、次に活かせると実感しています。これからもその姿勢を続けていきたいです。

(取材日：2025年7月)

● 取材後記 ●



現場でのイレギュラー対応では複数案を検討し、常に先を考える姿勢を大切にしている後藤さん。「土木は大雑把ではなく細かな積み重ね」と話していましたが、知識を吸収するだけでなく、自ら考え行動し、部下の成長を支える姿勢からは、社会基盤を守る技術者としての確かな歩みを感じられました。